

第5章

広がる「優しさと愛」の輪



●ファンたちのエール

hideのファンは、真由子さんとの交流をテレビや週刊誌を通じて、みんな知っている。関東地区に住むファンのうち、何人かが病院や、退院後のマンションに真由子さんを訪ねた。

茨城県日立市の滑川舞子さんが東海大学病院を訪れたのは、高校生のころの96年8月4日だ。対面のテレビ放映があったとき、友人から「真由ちゃんに励ましの手紙を送ろうよ」と提案された。

「人にものを頼むのは簡単だけど、真由ちゃんのために私自身で何かやりたい」

そう考えた滑川さんは小学校以来のhideファンで、コンサートを通じて知り合ったファンたちに募金を集める手紙を出した。

それが1万5000円ほどになったので、花を買って見舞おうと考えたのだ。病院へ行く前に小田急伊勢原駅前の花屋に電話をかけ、金額分のダリアを注文しておいた。いざ花屋で受け取ったら、50本もの花束になっていた。

病室で大量のダリアを見た真由子さんが、うれしそうにニコリした。この年2月にX JAPANが『DAHLIA』という曲を出していたから、滑川さんの意図がたちどころにわかったのである。

退院を1カ月後に控えた時期だったから、話題はどうしてもhideのソロツアーが中心になる。「ライブを見に行くには、元気つけなきゃダメだよね」

そんなことを言っている滑川さん自身が、何やら元気の素もとをもらったような気分になった。重い花束を抱え、駅からバスで病院までたどり着いただけに、真由子さんが納得した笑顔を見せたことで、たちまち真由子ファンになってしまった。それ以降、東京ドームでの再会を含め10回は会っているが、マンションに泊まり込んで真由子さんをカラオケに誘い出したこともある。

頻繁ひびんに会っているわけではないから、訪問するたびに真由子さんの回復ぶりがよくわかる。

「初めは座っているだけだったのが、次には杖を使って歩いているし、その次は自分の足だけで歩いているんですね。すごい病氣と闘っていて、絶対治ってみせるぞって感じが伝わってきました」

落ち込んだときなど、hideの曲にも勇気づけられ励まされるが、真由子さんを思い浮かべることでhideとは違った激励を感じる。

「こういうことなんです。私たちが頑張ってるから、真由子も頑張ってるねじゃなくて、真由子があるだけ頑張ってるんだから私たちも頑張れるし、頑張らなきゃっていう……。正直に言いますとね、テレビでの対面のことは友達に聞いただけで、そのときは『ひとりだけhideに会えて、ずるいな』って思ったんです。でも、ビデオを借りて見たら、そんなこと考えた自分がすごく悔しいというか情けなくなっちゃいました」

仕事の都合でもつかのころボランティアは難しい。滑川さんは今、美容師のインターンなのだ。「ライブに行つて、コスプレの人が髪の毛を立てているのを見て、ああいうファンの髪の毛をできたらいいなって、それが美容師へのきっかけでした」

滑川さんが高校を卒業して茨城県内の美容専門学校へ進学したら、そこにはもつとすごいhideファンがいた。千葉県松戸市の中山理沙さんである。

「hideさんの影響を受けました。決定的なのはhideさんが美容師を目指していたからですね」

母親が美容師をやっているが、とりたてて親のあとを継ごうと考えていたわけではない。なりたいたものはいくらでもあったが、最終的に絞り込むときhideの存在があった。だから、中山さんは大きな夢を抱いてきた。

「ちゃんとした美容師になって、自分自身よくやったと認められるようになったら、hideさんに会って今までの考えとか話して、hideさんの頭をやりたかったです。その夢があるからやってこられました」

しかし、hideは急逝してしまった。亡くなった当日は、仕事を終えて帰宅した夜の11時ごろ、滑川さんからの電話で知ったが、物事を考える力を失っていた。

「理沙ちゃん、どうしたの？」

翌日、美容院では上司にすぐ尋ねられた。いつも絶やさない笑顔がないどころか、ほとんど無表情だったのだ。葬儀のときは2日間、連休をもらって築地本願寺で献花をした。

「こうなって最終的な夢はかなわないけど、今までせっかく学んだことは無駄にしたいくないし、一

流の美容師を目指して頑張ろうと思うんです」

真由子さんとの交流は、週刊誌の記事を読み、メイク・ア・ウィッシュへ出した手紙に真由子さんが返事を書いてくれたときから始まった。電話もするようになったが、直接対面できるのはずっとあとの96年11月10日になる。高校3年生だったから日曜日を選んだ。

「対面のビデオも見ましたが、真由子は15歳の割に小さくて、でもかわいくてしょうがなかったんです。行くたびに何かしら持っていきましたね」

そのときは、X JAPANやhideの話で盛り上がったたり、hideとの写真を見せてもらったりした。その後、中山さんは月に1、2回マンションを訪れたが、高校を卒業した翌年春には2泊3日で和歌山の自宅を訪問した。

98年8月には20歳だ。注射針が怖いため、今まで献血もしたことはないが、骨髄バンクへの登録は覚悟を決めている。母の幸子さんが登録していることも手伝っているようだ。幸子さんはもうすぐ50歳を迎えるが、もっか准看護婦資格を取るための勉強に励んでいる。

「真由子と知り合ってから、いろんな影響を受けました。今回の件でも真由子はすごいなと思いましたがね。つらいんだけど、送ってくれるファクスを見て、真由子が頑張ってるから自分も頑張んなきゃと思うし、あんなちっちゃい体だけ出てるものはすごく大きい。いつもそう思っていましたけど、今回はそれを一番強く感じました。少しでも真由子の力になればいいなって思います」

hideについても同様だ。

「常に前向きで、何かあっても立ち止まらずに、なんでもプラスに考える前向きな姿勢はhideさんから学びました。今回、本当はすごくショックなんです。でも、hideさんだったらショックなことがあっても前に進んで行くだろうと思ったら、いつまでも落ち込んでいられないって前向きに考えられるようになりました。私の中でhideさんが背中を押してくれているんです。今までもこれからも、hideさんはずっと私の大切な人なんです。X JAPANそしてhideさんとの出会いが、私の人生を大きく変えました」

その中山さんが、真由子さんと会うときに心がけたのは、「何かをつくること」だった。

「ビデオを見たり、音楽を聴いたりするって、いつでもだれでもできるじゃないですか。だから、私はお菓子をつくったりしたりしたんですね。コスプレ衣装づくりも面白かったですよ。私は洋裁ができないから見るだけでしたけど、ね」

衣装づくりで実力を発揮したのが、プロログで登場した東京・江戸川区の藤巻夕里さんである。

中山さんが伊勢原のマンションを初めて訪れた96年11月10日は、hideファン6人が一堂に会した日でもあった。真由子さんが入院のため伊勢原にやってきた日、初めてマンションを訪れた川崎市中原区の平嶋弥生さん、横浜市南区の縄重恵さんもやってきたのだ。

「真由子に会いに行くんだけど、夕里さんも行かない？」

中山さんに誘われたとき、なぜか藤巻さんは素直に受け入れていた。それまで、千羽鶴づくりも

寄せ書きもすべてこわっていたのだ。

「テレビを見て『こういう子もいるんだなあ』とは思いましたが、私は真由ちゃんのこと理解してないし、気軽に『頑張って』と言える次元の子じゃないと感じていたんです。鶴を折って協力したとか、頑張ってと言ったとかで自己満足したくなかったんです」

マンションへ行ってみたら、真由子さんのほうが藤巻さんを知っていた。hideコスプレでは藤巻さんは有名だった。その写真をだれかが真由子さんに送ってあったことから、しつかり藤巻さんを記憶にとどめていたのである。

この藤巻さん一家は、親娘関係が実に面白い。X JAPANやhideのファンを子どもに持つ家庭は相当数に上るはずだが、「理解ある親」の典型といえる。

夕里さんがhideと出会ったのは、小学校5年生のときだ。音楽よりも先にスタイルにハマってしまったから、コスチュームプレイにかけては半端ではない。6年生で早くもコンサートに行き、高校1年の春の連休中に初めてコスプレを決めて東京・原宿でデビューした。

「自分では、とてもhideに似てるとは思ってないのに、『初めてとは思えないわよ』なんておだてられて、そこで味をしめてしまったんですね」

しかし、個人タクシーを経営する父・幸芳さんは頑固で厳しい。コンサート会場まで娘を送っていったときコスプレの女の子たちに仰天して、釘を刺した。

「あんな格好したら、家を追い出すからな」

それでやめるほど、夕里さんはヤワではなかった。母の房子さんと連携をとって、ずっと幸芳さんの目をかすめてきた。房子さんとコスプレ用の服をつくったことが、真由子さんのために役立つのだが、それはずっとのちのことになる。

夕里さんの自室には、高校生のとき撮ったコスプレ姿が、大きな写真となって貼ってある。

「あこがれてる女の子の写真なんだろう」

幸芳さんはずっとそう思ってきた。ただ、X JAPANの音楽そのものを嫌っていたわけではない。

「モロ演歌というんじゃないくて、チャゲ&飛鳥をこよなく愛するような親ですからね」

家族がどこかへ出かけるとき、夕里さんは助手席に座ると、すぐX JAPANのテープをカセットに入れる。

「ハードロックは、雑音そのものでしたよ」

やがて、バラードを聴いて、抵抗感を捨てた。それを知った夕里さんは、家族ぐるみでカラオケに行くと、ここぞとばかりにバラードを歌った。

幸芳さんは、コスプレにはいまだに抵抗がある。しかし、夕里さんを追い出すようなことは、もうしない。夕里さんが成人したこともあるが、幸芳さんが真由子さんと会ってから影響を受けたからだ。

97年5月、真由子さんは再入院中だったが、和子さんは「BMTハウスサポートの会」の紹介で

別のマンションに移った。夕里さんを送りがてら、幸芳さんも引越し作業を手伝ったのである。

部屋の片づけが一段落してから、真由子さんの病室へ行くことになった。

「ものすごく髪の毛が抜けているのに、実にかわいらしい顔をしているじゃないですか。夕里がお付き合いたいだいてるのは、こういうことだったのかって、そのあたりから考え方が変わっていったんですね。人の優しさっていうものを、真由ちゃんに学んだ気がしました」

自宅にやってくる全国の仲間たちを見て「いいヤツばかりじゃないか」と思ったり、そんなことから幸芳さんの変化は加速していった。夕里さんのコスプレ姿をまじまじと見たのは、やっと97年の解散コンサートでのことだった。

再び96年11月10日に戻る。真由子さんが、いろいろねだった。

「コスプレしてほしい」

普通の格好をして行った夕里さんが、衣装を着替える。

「メイクも」

かなり派手になった。

「私にも、やってよ」

キヤッキヤッと笑い声をあげながら、コスプレにメイクの姿で写真に収まった。

そんな楽しい時間も、やがて別れのときとなる。

「来週また来るよ」

夕里さんの口から、自然にその言葉が出た。自宅から伊勢原のマンションまで片道で2時間はかかるのだが、この楽しい雰囲気をもた味わいたい。すでに仕事を持っていた夕里さんは、日曜でないと来られないことがうらめしかった。
次に会ったとき、すでに「おねえさん」の存在となっていた夕里さんに、真由子さんは新たな注文を出した。

「私もコスプレしたいから、衣装づくりの手伝いをしてほしいな」
自らのコスプレを、母の房子さんに教わりながら仕上げたときの経験が、ここで存分に生かされることになったのだ。

真由子さんと和子さんが97年9月に和歌山の自宅へ帰るまで、仮住まいとなった伊勢原のマンションに、最も足繁く通ったのは藤巻夕里さんだった。自宅のファクスは、真由子さんとのやりとりのために買ったものだ。

96年12月30日と31日、X JAPANの年末ライブ「DAHLIA TOUR FINAL」が東京ドームで開かれた。サブタイトルは「復活の夜、無謀な夜」だ。

前日の29日に、富山県東礪波郡の藤井智子さんがマンションに遊びにいった。hideが亡くなったことを貴志さんに初めて知らせたのが、藤井さんだった。3人の子どもがいる藤井さんは、hideファンの中では「主婦ファン」に属する。

20代の終わりのころ、テレビのワイドショーでX JAPANのメンバーを見てびっくりした。そのころ小学生の長男に、厳しく告げたものだ。

「男のくせに長髪で化粧なんかして！ こんなこと絶対やめてよ」

数年たち、また朝のワイドショーでバンドのリポートを見ていたら、前とは違ってYOSHIKIの受け答えに感じるものがあり、音楽を聴いてから好きになった。長男にさんざん嫌みを言われてしまった。

「初めはビジュアルだけで判断したんですね。それが、YOSHIKIの音楽に対する見方とか、hideがカリスマとして尊敬しているとか、って聞いて、それにファンに優しいと言われるhideが好きになったんです」

特に藤井さんが感銘を受けた話が、ファンのあいだには語り継がれているという。

「単なるウワサ話かもしれないんですが、ライブ中に警備の人と興奮したファンがもめて、警備員が強く押さえ込んでファンが泣き出したっていうんです。そしたら、hideがステージを降りて警備員を怒ったそうなんです。つくり話の可能性もありますが、hideの『ファン思い』がこうした話になっていくんですね。そういうhideがますます好きになりました」

藤井さんはメンバーの似顔絵を描くようになった。このところは、hideの絵が多い。hideの瞳が魅力的だからと、特にその部分は微細に描く。年末ライブで、ファンのみんなにそれらの絵を見せらうのが楽しみだったのだ。

真由子さんとhideとの対面は、やはりテレビで知ったが、文通友達から千羽鶴づくりに協力してくれないかと頼まれ、知人に呼びかけたら5000羽も集まった。友人の都合が悪くなり、藤井さんがメイク・ア・ウィッシュを通じて送り届けた。そのとき、hideを中心に似た似顔絵20枚を同封したのである。

ファイル入りの絵は無菌室の中でも真由子さんを励まし、和子さんから礼状が届いてから交流が始まった。96年秋のhideのソロツアーのとき、金沢会場で真由子さんの写真を持って一緒に楽しんだ。

「hideがドナー登録したとき、『あ、やってくれたな』って、ちょっと変ですがhideとしては当然かなと思いましたが、『おれはこんなことぐらいしかできないから』というhideと同じ気持ちに私もなりました」

だから、藤井さんも真由子さんに様々なことをしたいのだが、遠隔地でもあるため絵を送ることぐらいしかできなかった。手紙も当初は毎日書いていたが、家事もこなさなければならぬ。電話代もバカにならない。

「ある日ひらめいたんです。真由子とhideさんとの恋愛小説にしたらどうかって。ハガキにラブストーリーを書いて毎日送ることにしたんです。ますます深いお付き合いになったのは、これがあつたからでしょうね」

X JAPANの解散あたりから中断しているが、すでに155通に達している。このラブストーリーは完結しないことになっている。

「ただ、真由子が落ち込んだりハビリしなくなったら終わるよって言ってるんです。解散のときもそうでしたが、亡くなったときどう励まそうかと思つたとき、小説について聞いたら『つづけてほしい』という答えでした。『その代わり条件あるよ。いつまでも泣いてたり、薬を飲まないなんて言い出したらやめるからね』って約束しました。私には、そんなことぐらいしかできないんですよ」

互いに信頼しあつた関係でないと、こんなことはできないだろう。それは、hideがあいだに立ってくれているからだ、藤井さんは思う。

「真由子と付き合うと、みんなそうでしょうけど、私たちなんかよりよほど強い真由子を目の当たりにするんです。痛いのに痛いと言わない、とか。そういうことを表に出しません。周りに心配かけまいとしているところなんか、hideそっくりだと思えます。だから、逆に私たちのほうが励まされているんですね」

97年8月に伊勢原のマンションへ何人かが押しかけて泊まつたとき、藤巻さんと話し合つて決めたことがある。手づくり新聞の発行だ。忙しくて延び延びになっていたが、hideが亡くなつてから創刊号を発行した。

その名も『真由子日日新聞』という。ファンはよく知っているが、hideのホームページの中に公開されている新聞が『松本日日新聞』で、それに倣つたものだ。発行人は藤井さんだが、編集長を真由子さんにしてあるのは、少しでも落ち込みから立ち直つてほしいからだ。

「真由子にはずいぶん手紙が来ますが、全部への返事はすぐ書けません。出したほうはすぐにももらえるだろうと期待しているでしょうし、とりあえずこの『日日新聞』を送って、真由子も頑張ってますよと伝えたいのがきっかけなんです。だから、ファンのみんなも頑張れよってね」

「骨髄バンクへの理解と協力はしたいが、ドナー登録はまだだ。」「気持ちはあるんですが、もしHLAが一致して提供できるかといえは、今は小さい娘も抱えていて家を空けられません。そんなときに登録するのは無責任だと思います」

移植のためのドナーを待つ患者の苦衷も、和子さんから常に聞かされていたのだ。

「いざ一致して、家族が反対するから提供できないことがあるわけですよ。私の場合は、子どもに手がかからなくなつて入院が可能になるまで、登録は待ちたいですね」

こうした、伊勢原のマンションを訪れるファンが、必ず一度は「？」と感じる出来事がある。

政人さんがマンションにいるとき、電話がかかってきた。和子さんが政人さんに受話器を渡す。

「パパからよ」

エッ？ パパからつて、真由子パパはここにいるじゃないの？ だれもがそう思う。そこで政人さんや和子さんが説明してから、みんな大笑いになる。

貴志家では祖父がパパ、祖母がママなのだ。政人さんはお父さん、和子さんはお母さんと呼ばれる。

仁美さんが生まれた78年10月、祖父の守さんはまだ51歳だった。

「これで、『おじいちゃん』じゃ、ちょっとかわいそうだよ。そうは思わんか？」
守さんの一言で決まった。

和歌山の貴志さんの家には、とにかく猛烈な量の手紙が届く。今は慣れっこになった配達郵便局員が、初めのうち「何事か」と仰天した。

真由子さんはなるべく全員に返事を書きたいのだが、手指にも障害が出ているから、書くスピードが遅いため、気持ちどおりにはならないことが多い。いまだに顔すら見たことのない文通相手はずいぶんいる。

東海大学病院のある伊勢原のマンションから和歌山へ帰るとき、そうした人々へ出した挨拶状は500枚にも達したが、北海道から沖縄まで全都道府県にわたっていた。

島根県浜田市の岡本透さんも、そんな「まだ見ぬ激励者」のひとつだ。岡本さんは中学1年のときX JAPANのファンとなり、2年生でギターを弾き始めてからhideに傾いた。hideと真由子さんの対面をテレビで知って、励ましの手紙を出そうとテレビ局に住所を尋ねた。

「直接、伝えることはできないので、転送しましょう」

そう言われた岡本さんは、手紙を書きながらふと思った。

「同じように考える人々が、全国にいるんじゃないだろうか」

音楽雑誌『ブルズメイト』の投稿欄で、真由子さんへの激励の手紙を募集することにした。96年10月号に次のように掲載された。

〈難病と戦っているX FANの貴志真由子ちゃんに励ましの手紙をまとめて送ろうと思うのでどうかみなさん、励ましの手紙をぼくまで送ってください〉

非常に小さな活字で、ページ数の多い投稿欄では埋もれてしまいそうだったが、それでもそのころ高校1年生だった浜田さんの自宅には、60通近い手紙が送られてきた。それらはテレビ局から、すべて真由子さんに転送された。

それを覚えている人々がまだいて、hideが急逝してからすぐ、真由子さんを励ます手紙が10通ほど浜田さんの自宅に届いた。今は真由子さんの自宅住所を知っている浜田さんが、さっそく転送したのは言うまでもない。

●親を乗り越えた

1996年9月に退院してからは、慢性のGVHDが少し出てきたため、薬の処方を変えるなどしたが、それらは通院程度で済んでいた。

ところが、97年2月20日になって熱が出てきたのである。医師は感染症の可能性があると見て、抗生物質を使ったが熱は下がらない。

「細菌が入り込んだ熱ではなく、なんらかのウイルスによる熱のようですね」

小児科の加藤助教授はそう見た。そのころインフルエンザがはやってもいたからだ。その程度で

済んでくれればと願ったものの、一向によくならない。熱は39度に達した。医師団には不吉な予感がした。

「EBウイルスじゃないでしょうか」

退院間近まで順調な経過をたどっていた平田浩三さんの命を奪ったのが、このEBウイルスだった。そうなる、通院というわけにはいかない。28日に再入院となった。

加藤助教授は、リンパ球輸注(DLT)の実施を決めた。DLTは日本ではまだ症例の少ない治療法だが、ドナーから採取したリンパ球を、移植を終えた患者に注射して白血球細胞をたたくもので、白血病の再発防止に役立つとされている。真由子さんの場合は、EBウイルスを抑えるのが目的だった。真由子さんのドナーとなれば、仁美さんである。3月13日に仁美さんのリンパ球が真由子さんに輸注された。

ところが、2日後に気胸となり、またも危機が訪れたのである。肺にチューブが取り付けられた。22日になって、心臓の周りに水が溜まってきた。深夜にそれを抜く処置が始まったが、前年4月の後遺症からうまく抜くことができず、熱は40度を超えてしまった。24日は両方の肺が水びたし状態となり、改めてチューブが取り付けられた。

ようやく熱が下がり始めたのは25日になってからで、3月末までは痛み止めの薬が連続して投与された。

危機は再び去った。真由子さんは仁美さんから2度、救われたことになる。仁美さんは、福岡市

内の薬科大学の入試を済ませたばかりだった。

「医学部へ行ってもいい？」

真由子さんが移植を受けたころ、仁美さんは両親にそう尋ねた。そう考えるのは、妹の病気があったからだ。いい返事をもらったのだが、それまで理学部への進学を目指していた仁美さんは、いろいろ考えているうちに、どうも医学部は合わないような気がしてきた。むろん、成績との関係もある。

医師は患者を診て、治療のために必要な薬を処方はするけれど、その薬はすでに出来上がっているものだ。

（でも、真由子には、病気に効く薬すらなかった……同じように、薬に恵まれない患者は、これからも出てくるだろうなあ）

そう考えていくと、進むべき方向が固まってきた。それが薬科大学だったのだ。現役合格を果たした。薬剤師の資格も取得できるが、病院の薬局に勤務するつもりはない。卒業後は、薬剤の研究・開発に取り組みたいと考えている。

真由子さんがDLT療法を受けたちようど同じころ、小児科病棟では4人の患者が危険な状態に陥っていた。2人は残念な結果になったのだが、真由子さんともうひとりの男児がなんとか危機を脱した。その男の子は3月27日が誕生日だった。その日、真由子さんが和子さんにねだった。

「あの子に、誕生日のプレゼントをあげたい。1本ずつ数えられる花を、10本ね」

和子さんは、真由子さんが勘違いしていると思った。その子は9歳の誕生日なのだ。

「いいのよ。だって、9歳の誕生日なんだから、また10歳の誕生日まで頑張れるように、10本なの」
びっくりしたのは和子さんだ。勘違いと思った自分が娘の優しさを勘違いしていたと、わが子に教えられた気がした。

（真由子は、こんなことまで考えるようになったのね。きつと、いつも前向きに考えようとするhideさんからもらったんだわ）

その子は、残念ながら4日後に容態が急変して亡くなったが、のちにこの話を聞かされた政人さんも舌を巻いた。幼いとはかり思っていたわが子が、親を乗り越えてしまったように感じたのである。

（そういえば……）

真由子さんの「しつかりぶり」を思い出さないわけにはいかなかった。

病名は確定されたものの、日赤和歌山医療センターでは治療法が示されず、仕方なく畿内の国立大病院を訪ねようとしたとき、怒った真由子さんが言った言葉が蘇^{よみがえ}ってくる。

「私の病気なのに、どうして私に相談しないで、家族だけで決めてしまうの？ それが我慢できないし納得いかない」（第1章参照）

あのとき、病気への対処だけでなく、様々な事柄について両親は真由子さんの意志を尊重してい

こうと決めたのだった。

hideとの交流をテレビが取り上げたとき、番組制作のディレクターが仮名で紹介しようかと提案したら、真由子さんはきっぱり言い切った。

「この世から、私という存在を、仮名によってなくしたくない」

ディレクターといえば、仁美さんも骨髄液の採取前後にこんなことを答えていた。

「真由子のような妹を持って、私は幸せです。真由子の大変さに比べれば、私のことなんか全く大変じゃありません」

前処置から移植後しばらくは、抗ガン剤の副作用によって髪の毛が抜け落ちる。多感な年ごろの女の子には耐え難い苦痛なのだ。抜けてしまうのを防ぐことはできないから、たいていの患者はキヤップをかぶるか、病状が落ち着いてくるとカツラを利用する。

真由子さんは、ものともしなかった。そのままの姿をテレビカメラの前にさらした。

「病気になるたのは、私の責任じゃない。だから、恥ずかしいとも思わないし、隠す必要もないの」

大きな危機は2回あった。それを乗り切ることができたのは、真由子さん自身のこうした姿勢にも関係があると、小児科病棟でほかの患者を見てきた和子さんは、心から思う。

2度目の高熱による入院のときから始まったリハビリで、医師からは「単独で歩けるようになるには、6カ月はかかるでしょう」と言われた。それが、3カ月で済んだ。

「治らなければ、歩けるようにならなければ……という気持ちを、ずっと持ちつづけていたからでしょう」

そう思う。

移植が2週間違いで、年齢がひとつ下のある患者は、回復がはるかに遅れた。その子の場合、大部屋のカーテンを開けるのすらいやがった。とことん、自分の中に閉じこもっていた。医師がつぶやいたものだ。

「真由ちゃんとおの子を、足して2で割るといいんだけどな」

もともと「規律正しさ」の面を持っていた真由子さんだが、hideとの交流が始まってから、特に強くなった。

(とにかく、hideのために治りたい、早くよくなりたいと、ひたすらそれだけを考えているみたい)

両親は、hideの存在の偉大さを、改めて思い知るのだった。

だからといって、hideに甘えるようなことはしなかった。コンサートチケットなど、hideに頼めば入手できるだろうに、律儀にほかのファンと同じようにファンクラブから購入した。「特別扱い」は本人がとても嫌がるのだ。

それだけに、ほかのファンと同じように行動したいという思いが、真由子さんにはとても強い。hideがドナー登録したときのエピソードがある。

「hideさん、登録してくれて、よかったよなあ」

夏休みを利用して和歌山から出てきた政人さんは、当然のように喜びの答えが聞けるはずだと思つて、真由子さんに誘い水をかけた。

「いや」

真由子さんは、意外にも首を横に振った。

「いやつて、適合する患者さんがいたら、その患者さんが喜ぶじゃないか」

それ自体が嫌なのではない。

「私は、ドナーになりたくても、なれない……」

hideと同じ行動をとりたい真由子さんにとつて、これほどつらいことはないのだ。記者会見でhideが示したドナーカードを、自分は持つことができない……。

男の子への誕生日プレゼントの話をめぐつて、あれやこれやを振り返った政人さんは、こんな思いに駆られていた。

「平凡な親子関係だったら、親がわが子を『尊敬する』なんて、そうあることではない。でも、そういう気持ちを持たせてくれた真由子つて、こりやすくないなあ」

これこそ、病気を仲介にして、しかしなお、憎まずに病気と共存していく姿をあらわしたものはないか……。

真由子さんは、親を乗り越えてしまった。

●Eメール交換

真由子さんの再入院は、97年6月19日にピリオドを打った。BMTハウスサポートの会が紹介してくれた新しいマンションは、3LDKと広い。それに賃借料も、それまで借りていた民間のワンルームマンションの半額になった。

退院後の東海大学病院への通院は、もっぱらリハビリ訓練のためだった。

3カ月後の9月27日には、政人さんが運転するワゴン車で、和歌山市の自宅へ戻った。96年2月16日に伊勢原へ行つてから、1年7カ月ぶりのわが家である。

しかし、真由子さんは落ち込んでいた。というのも、まだ伊勢原にいた9月22日に、X J A P A Nは解散を宣言したからだ。記者会見で、ピンクに染めた髪とサングラスであらわれたhideは、こんなことを言っている。

「待たすだけ待たしたファンの人たちには、本当、申し訳ないと思います。わがまま三昧さんまやつてまわりましたが、最後のわがままごめんさい。そして、ありがとうございました」

その席に、ポーカーのT O S H Iの姿はなかった。多くのファンは、T O S H Iがすでに4月に脱退していたことを、この記者会見によって初めて知った。

真由子さんは盛んに寂しがつたが、いつまでもよくよくしてはいられない。寂しさを少しでも和らげてくれるのが、hideとのEメール交換だった。

「ちゃんとしたパソコンでやったほうがいいよ」

それまでは、ゲーム機のセガ・サターンにモデムを取り付けてパソコン代わりにしていたが、最後の退院を機に、hideが強く勧めた。

hideは、98年1月から「hide with Spread Beaver」のホームページを立ち上げた。X J A P A N解散後のライブ活動を進めるため、それぞれがソロ活動をしていた6人を集めて結成したグループだ。

ホームページにアクセスすると、hideや6人のメンバーとともに、真由子さんのサイトにたどり着くことができる。そこへメールを書き込むと、いたずらなどを除いて管理者が転送してくれるシステムになっている。

それまでは、96年9月に開いたホームページがあり、その中に真由子さんのサイトを97年3月に置いた。hideへのEメールだけでなく、こうして転送されてきたメールを通じて友達になっていく人々も少なくない。

宮城県栗原郡の木村江里さんは高校1年生だが、真由子さんには「江里たん」と呼ばれている。hideと真由子さんの対面はテレビを見て知っていた。中学2年のころだ。

「へえ、あんなふうには髪を染めている人が、こんなにも優しいんだ」

そんな印象しか持たなかったが、なんだかhideに惹かれていくな、と思った。ところが、その後ライブ映像を見る機会があり、頭を激しく振りながらギターを弾いているhideを見て、刺

激が強すぎたのか怖い存在へと変わってしまった。

再び急激に変化して、「惹かれていく」どころか「ハマった状態」になったのは、98年1月30日だった。高校入試へ向けて、ラストスパートという時期なのに、江里さんはさっぱり勉強が手につかない。テレビの音楽番組をボーッと見ていた。

hideが歌い出した歌詞を耳にして、鳥肌が立った。28日に発売されたばかりのhideの8番目のシングル『ROCKET DIVE』である。

「なんだか私のためにあるような歌詞じゃないの……」

翌日すぐにCDを買い、それを聴きながら勉強していたら、意外とはかどるのだ。それでも、入試2日前には気持ちが落ち着かなくなり、父の廣志さんが使っているパソコンからhideのホームページにたどり着いていた。

「あれ？ この『MAYUKO』ってあるのは、なんだろう？」

それまで何度かアクセスしていたのに、そのとき初めて気づいたのだ。クリックしたら、真由子さんの難病について説明してあった。

「エッ？ あれからもう2年もたつのに、hideさんはまだ真由子さんと付き合いがあったんだ」不思議な感じがした。驚きだった。超有名人が、こんなにも長く交流をつづけていたとは、思ってもみなかったのだ。江里さんは、書き込み欄に夢中になって文字を打ち込んでいた。hideのファンになったこと、ホームページを開いてびっくりしたことなどを書き連ね、最後にこんな追伸

を添えた。

「私は3日ごとに、hideさんのホームページを見ています。なぜなら、3月9日に受験があるので、父に制限されているのでしゅ。あーあつ来週は入試だ!! 真由子さん! 応援のメールを…」
…(笑)

入試の前日、江里さんは極端に緊張していた。

「どうだ、メールでも見るか」

廣志さんが開いてくれた受信トレイを見たら、真由子さんから返信が届いていた。応援メールだ。「これって、ホントなの? ウソじゃないわよね!」

信じられない思いだった。うれしくなった江里さんは、何度も読み返した。その夜ぐっすり眠れ、試験中も緊張せずにリラククスできたのは、このメールのおかげだと思っている。帰宅してからは長文の礼状をメール送信した。

それ以来、毎日のようにやりとりがつづき、すでに100通を超えてしまった。

インターネットに年齢制限はない。茨城県稲敷郡いなしきの長南佳代子ちやうなんかよこさんは31歳である。真由子さんからは「まきママ」と呼ばれている。それは実家に近いアパートで、5歳になるひとり娘の真貴ちゃんと暮らしているからだ。真貴ちゃんはゼンソク気味だ。

hideをテレビで初めて見たとき、お、カッコいいギター弾きだなと感じてファンになり、X

JAPANの曲を、「なんとなく」聴き始めて次第に好きになり、やがて「とりこ」となってしまった。

「hideって、あんなに激しい音楽をやっているのに、すごく優しい顔して笑うんです」

もっぱら聴くばかりではあるものの、もともと音楽が好きだった。人に感動を与えるような音楽を奏でる人の真心は、音楽を本当に愛していないと伝わってこないし、人柄が出てくるものだと思う。

「あの激しい曲も、なんだかまっすぐで、ストレートにぶつかってくるって感じ。でも、静かな曲は優しくて、胸の内側に染み込んでくるような…。Xのメンバーは一生懸命さが伝わってきて、本当に楽しそうで、輝いて見えました」

中でもhideは、楽しみながらギターを弾いていて、うらやましさを感じた。曲を聴きながら、いつも「元氣」をもらっていたように思う。

だから、真由子さんとの対面のテレビも、しっかり見ていた。

「ただただ感動しました。hideは、やっぱり優しい奴なんだって。そして、あのマフラーですよ。『ずいぶん、時間がかかったんだろなあ』と思いました。hideが、その場ですぐ首に巻いて真由ちゃんにはほえんだのを見て、また泣きました」

その光景を思い出したのは、真貴ちゃんのゼンソクが少しよくなって、心の余裕ができたころだった。

「そういえば、hideが応援してた真由ちゃん、どうしてるのかなあ？」
江里さんと同じように、hideのホームページの真由子さんのサイトを開いて、メールを送った。

「何万人というhideファンのひとりで、そこらへんにいるおばさん（でも、気持ちと格好は若い、つもり）です」

そんな内容だったが、すぐに真由子さんから返事があって、インターネットでの交流が始まった。長南さんは、つくば市にカクテルバーを経営している。98年2月に改装したのを機に、いつそhideにちなんだ店名にしようとひらめき、いきなりhideにメールを送ったことがある。

〈実は、私、店（ショットバーもどき）をやってまして、今回、店を改装して店名も変えたいと思いついて、検討しております。それで、店名に「Mix Jelly」というのを使わせて頂けないかと思いついて、今回Mail書いております〉

好きな超有名人に、いきなりメールを出す緊張感が、実によくうかがえる。Mix Jelly というのは、hideのメールアドレスの名称だ。

〈実は、本日にて改装は、終わっちゃいます（笑）。諸届には、「（仮）Mix Jelly」と店名書いてやってきました。が、正式に店名の届けを出さないとならない時期となりまして……。それで、出来ましたら、あの、支障があるんでしたらすみやかに諦めます。でも、でも、もしつ問題なかつたら、店名を「Mix Jelly」とさせて頂きたいんです（だめかな……。hideち

やん、お願い……）

送信はしたものの、まさか返事が来るとは思っていなかった。そのまま「勝手」に店名に使ってしまうつもりでいた。数時間たってインターネットに接続したら、なんとhideから返信が届いているではないか。

〈もちろん、いいですよ……光栄ですよ。hide〉

欣喜雀躍とはこのことか。町じゅうの人々に、これを知らせたい衝動に駆られるくらいの感動に、長南さんは包まれた。しかも、時間表示を見たら、送信してわずか30分後にhideは返信を書いてくれた。

店内が、hideのポスターなどであふれ返っていることは、言うまでもない。

hideのドナー登録でも、心を動かされた。hideが会見で答えた言葉を、正確にはないが、長南さんは今でもはつきり覚えている。

「自分に何ができるなんて思っちゃいけませんよ。でも、会って手を握ってやることとかできるでしょ？」

その言葉があったから、真由子さんとメール友達になれたと思う。

そして、長南さんは真由子さんから、多くのことを学んだと感じている。

「常に前を向いてる彼女は、hideとだぶるところがたくさんあるんです。『やれることは、なんでもやる』って感じでしょうか。『難病と闘ってる』という感じではなく、『病気というペット』の

頭をなでてかわいがっている、とても言えбайいでしょう。心の中では、かなりの葛藤があると思いますけど、メールにはいつも楽しかったこと、うれしかったこと、それにこれからのことなんか書かれていて、ひと回り以上も年上の私が落ち込んでいるとき、とっても励ましてくれるんですよね」

インターネットでの極め付きは、なんといっても真由子さん自身の、hideとの交換メールだ。セガ・サターン時代のもは残っていないが、インターネットになってから25通のメールが届いた。すべてを公開する気持ちにはなれないようで、真由子さんは5通を提供してくれた。

〈To Mayuko

テレビあつたんだね。知らなかった……。

誰かにビデオ見せてもらいます。

なんか、みなさん、まゆこが和歌山に帰郷できたのが、すごく嬉しいようで、ボードを見てたら内容が伝わりました。

私は次のアルバムの準備をしています。

本日もパワーとともに……。 hide

和歌山へ帰ってきたところまでの映像が、TBSで流れたあとの97年10月8日のメールだ。

〈おはようございます。〉

風邪はひいてないですが、雪には恐れおののいています。

もうすぐ、テレビなどで歌わなきやならんので……。

東京はメッポウ雪に弱いです。

まだ、降るなんて話もあるので、きをつけて、病院に行ってください。

ピラニアをあまり、かわいがりすぎて、かいいぬ……ならぬ、かいピラニアに手など

かまれんよう……

98年1月の関東地方は、2度の大雪に見舞われた。これは、2度目の雪が峠を越えた1月17日である。

へいやあ、まだ降ったりやんだり、こんなLAは初めてなのだ……。

時差ボケも続くのだ。

マユもがんばるのだ……

エルニーニョ現象の影響か、このところ世界各地で異常気象が起こっているが、2月のロサンゼルス(LA)の雨にはhideもびつくりした。乾燥している土地でギターの音もいいからと、1年の半分をロサンゼルスで暮らすhideにも、そうはない経験だったようだ。相変わらず時差ボケには弱り果てていた。

3月11日、真由子さんは自宅で意識を失って倒れた。意識は間もなく取り戻したのだが、原因がわからないまま2週間後に熱を出した。38度ほどになったが、これも原因がわからないうち3日後

には平熱に下がった。

普通の生活に戻ったところで、この話題をメールに載せたところ、hideがすぐに返事を書いてくれた。

「夏からの、楽しい事をたくさん考えるんだぞ。」

「そんで、熱などよりつかないように、してな。」

「こっちはまた、雨ですわね。」

3月26日のことだ。夏には、hide with Spread Beaverの全国ツアーが計画されていた。詳しい日程はまだ決まっていなかったが、真由子さんは可能な限り全国を回って回るつもりだった。

そればかりか、このメールによって勉強への意欲を高めた。2年前に入学した陵雲高校は、伊勢原暮らしが長かったため、毎日曜のスクーリングもほとんど出席できていなかったが、全国ツアーを回れるくらいなら、学校にだって通わなくてはいけない。そうすることが、hideにも喜んでもらえる……。

「リポートもちゃんと出そう。そうするには、初心に帰ろう」

通信制の陵雲高校は単位制だから、この4月から一応「3年生」とはなるのだが、真由子さんは在校生でありながら、4月19日の入学式に出席した。2年前は政人さんが代理出席していた。

和子さんが一緒についていったところ、なんと新任教頭の貝尻加寿代先生が、和子さんの恩師だった。和子さんは和歌山県立星林高校で学んだが、1年先輩だったのが政人さんで、ふたりとも貝

尻先生には数学を教えられていた。

「まあ、奇遇ですわねえ」

母と教頭先生が談笑しているのを見ながら、真由子さんはこれなら勉強にも身が入るだろうと、大いに期待していた。

最後のメール交換は、4月24日だった。

Spread Beaverのメンバー6人とhideの全身像を、ひとりにつき1時間ほどかけてパソコンで描き終わった真由子さんは、hideの分を画像処理して送信したのだ。返事が、その日のうちに送られてきた。

「今月中には一時帰りまする。」

送ってくれたファイルは僕はマックなので開けませんでした」

hideは、真由子さんが描いたその全身像を、ついに見ることができなくなった。

4月27日、hideは3カ月ぶりに帰国した。新曲のレコーディングが待っていた。5月1日も深夜まで仕事をこなし、日付が変わった2日明け方まで、Spread Beaverのメンバーらと、いつものように酒を飲んだ。東京の自宅マンションに帰ってきたとき、空はすっかり明るくなっていた。

そして……。

●もっぴひりの難病患者

真由子さんが hide とメール交換をしているのを知らないまま、独自に hide にメールを出してメール交流をつづけた難病患者がいる。北海道稚内市わっかないひらまいの平間愛さんだ。

平間さんが右手親指に違和感を覚えたのは、札幌の専門学校に通っていた94年7月だった。そのまま放置していたら、右腕全体の動きが悪くなった。

「気のせいですよ」

最初に訪れた病院でそう言われ、内心ホッとしたのだが、症状は一向に改善に向かわない。不安がつつり、別の病院へ行ったところ外科から内科、脳外科と回され、最後に神経内科にたどり着いた。

「検査のため、入院していただきますよ」

入院中も病状は進行した。下された診断は厳しいものだった。

「筋萎縮性側索硬化症です」

ALS と略称されるこの病気は、神経が侵されて全身の筋力が失われ、自分では体が動かせなくなる。食べることも、話すことも、呼吸することもできなくなる、愛さんの表現を借りれば「とんでもない病気」だった。

親指に異常を感じてから1年後には、寝たきり状態となった。母の隆子さんが教職を退いて看病

に専念したが、このころの愛さんは毎日が灰色だった。

「どうして、この私が？」

病気が進行していく現実を受け入れることができない。呼吸補助の機械を使いながら、医療スタッフに気持ちを打ち明けてはみるものの、自分自身がずいぶん混乱していた。

なんとか冷静に自分を見つめられるようになってきたのは、20歳の誕生日を迎えた95年6月ごろからだだった。

「どこで療養しても同じなら、家族の中で暮らしたい」

自発呼吸は、かなり弱くなっていた。

「このまま死んじゃうのかなあ。死ぬにはまだ若いのに……」

一時的な退院で家族に囲まれて暮らすうち、決断を下した。

「生きつづけるためには、人工呼吸器をつけよう！」

しかし、人工呼吸器の代わりに、声を失うことになる。覚悟のうえだった。人工呼吸器を取り付けるための手術は95年12月に受けた。

96年7月には札幌の病院を退院した。在宅生活のスタートである。

「声を失い、体の自由も利かない、おまけに食することもできない、悲劇の主人公の生活なんて、いくらでもできちゃう。でも、そんなのつまらない、対話する手段はいっぱいあるわ」

その手段がインターネットだったのだ。96年11月にパソコンが届いた。幸い、左手の人さし指は

動かすことができる。パソコン操作を身につけ、98年3月にはボランティアの協力を得てホームページ (<http://www.souyanet.ne.jp/lovely/>) も開設した。

ホームページで愛さんは、自己紹介をこう結んでいる。

〈私の目標は、毎日を明るく楽しく生きる事です。〉

「人生苦あれば楽あるさ」

さあ、今日も明るく楽しく頑張ります

その愛さんが、難病のファンとして、hideに初めてメールを送ったのは98年2月だった。返事がくるかこないか、たとえこなくてもhideへの思いは伝わるにちがいないと思いつつ、すぐに返事が来たことには、とにかくびっくりした。

愛さんとhideとの交換メールは発信が12通、受信が11通だ。そのうちいくつかを掲げよう。本人にしかわからない表現もあるが、ニュースはそれなりにつかんでいたたくとして、ここは注釈をつけにくいことにする。なお、行頭に「△」が付いている部分が、愛さんが書いたメールで、愛さんの送信日時を記した。

To 愛

〈好きな事して、遊んで仕事するってどんな感じ?〉

そうだねえ、俺の場合は、もともとこの趣味がこうじて職業になってるからな。まあ、それでお金

もらうように、なると、それはそれで、めんどろな事もあるけど楽しんでるよ。

〈私、この22年間、????だらけです

そうかあ。

〈なんで全てあるのに、声もあつてなにもかもあるのに、退屈といえるんですか?〉

なんで、だろうねえ? ここじゃないどつかに、ホンとは、行きたいのに、行き方もやり方もわからなくて、待ってしまう感じなのかなあ? でも、なんでもあつても、退屈って、おのおのが、望んでなるものでもないからねえ。ちゃんと、答えられなくて申しわけないッス。

(2月26日13時37分)

〈でも?????が、増えてしまったなー

〈楽しむ事って、どんな感じ?〉

〈例えば私が、楽しむには沢山の壁がありすぎで????です

そーだなー、君の場合とじゃあ比較にはならんだろうけど……なんだろう? なんの種だかわからん、種まいて一生懸命、芽が出るのを待って、それでも枯れちゃう時もあるんだけど、ドキドキ待ってしまふ時の感じに似てんのかなあ?

〈やっぱ、なーんでもあるのに

〈退屈もあるんだ

〈気軽に遊んだり、私にできない

へいっっぱいの自由があるのにな?々です

そーだよなあ。ぜーたくだよなあ。でも、人それぞれの気持ちのフリコは比べられないからなあ。あー部屋が狭いって文句いうやつもいれば、雨がうつとーしーって言うやつもいたりや、髪形が決まんねーつつって、憂鬱になるやつもいるわけだ。まったく、我がままもんだよなあ。

へじゃー元気ってものは

へどん底にいるとき、どうすれば

へつかめるの

へ私の?に少しつきあってください

あんな、君にあてはまらないかもしれない答えしか出せんで悪いんだけど、俺の場合は、想像する、なにがなんでも、想像するなあ。なんか、そのイイ感じの自分とか、こうなりたい、とか……。その悪い現実をじつと見てるよりは、ほんのチョットだけ気持ちは、前向いてくるかな。それで、気がついたらトンネル抜けてたりするんだが。俺の場合なんだけどな。

へそれでは答えてくれたの、嬉しかった

へはじめてだから

へそれでは

そっか、なんか、答えにゃなつとらんけどな、いい大人が。また、書いておいで。

hide

(2月26日19時45分)

へさてさて前から、愛は障害年金で暮らすみ

へでーも、やつと稼いだのであります!

へ唯一、動く左手の人さし指で!!

へ原稿書いて、がんばっちゃいました!

へ3千円!!!!

へ愛は、嬉しいぞ

なーに書いたの?

(3月3日16時04分)

へ頭を、なでてほしい気分!!

へよしよしよし!!!

よし、よし、おっさんでよけりや、いくらでも、ほめたる。君に比べたら、俺なんか、歌の詩、書くのに、箸が転んだ様なつまらん事拾って、書いてんだなあって思うぞ。

よしよし、もいつかい、ほめちやる……。

(3月3日20時21分)

へ今まで、楽しみをおもちや箱に

へ閉まったままで、取り出したら

〈壊れてた経験ありますか？〉

なんか、禅問答のようだな……。ちょっと違うが、以前に夢中になって集めたりしてた物や、夢中になっていた物が時間がたって、見てみたら、?????つてのはよくあるよな。その逆もあるぞ。昔夢中になって、してた事や物が、時間がたってやつと、認められたつても……。

〈遊園地を壊すのは簡単で

〈遊園地は誰にでも楽しみを

〈わけてはくれないの？

禅問答？だなあ……。遊園地みたいなのは、多数決の楽しみなんだよな。平均的な……。大多数の人の楽しい、面白いの平均を集めたもんですな。なんていうか、ね？ ね？ っつて暗黙で確認できちゃう楽しみ……。？ 楽しいは楽しいだが、貴重なもんじゃない。

世の中の人々の中でも、人と違う楽しみや物の見方をした人間が、新しい物を創ったり、偉人と成りえたりしてますわなあ。マッキントッシュのCMでは言っております。世界の偉人をつかまえ……。THINK DIFFERENCE……♪。

(3月6日9時27分)

〈こんにちは！

〈今日は、お願いをしたくて

〈書きました

〈愛の春の出会いの中に、登場してもいいですか？

〈あの、まつ兄と呼びたいんだけどいいですか？

〈少しでも動くところがあれば

〈心の言葉もはぎだせるし、大爆発もしなくていいよ

〈天井ばかりみてるのとボケちゃう、楽しく胸はっつて

〈堂々と難病者ライフやって、楽しもうぜってなことを

〈かきたいんです

〈愛はメールができて、いろんな世界や人にであえて

〈今があるから

〈伝えたいんです、いいでしょうか？

〈もっちらんでさあ……。？

(3月17日13時)

〈まつ兄へ

〈春という何が浮かびあがりますか？

〈この前ね、楽しもうぜって文かいただけ

〈愛は書けないの、楽しいこと体験してないから

〈想像してることでもいいのかな？

〈与えられたものは、春がテーマ〉

〈愛ね病気の事は救急箱につめこんでさ〉

〈せめて一時でも今がとてまあいせるよって〉

〈なればいいなーって想うの〉

〈でもどう書けばいいのかな？〉

〈まつ兄はどう思う？〉

まつ兄って……はじめてだなあ……。

俺あんまし、楽しい事って、詩に書いた事ないなあ、そういえば……。でも、物を書くって事は事実ですら、ある種、想像で創造するからねえ。

あと、俺は眠れない時はね……すぐおおいんだけど、自分がこうなりたい、とかああなりたい、とかこれしたい、あれしたい、つてのを想像するのよ。ぜったーい無理って人が聞いたら言われる様な事をね……。するつてーと、眠れたりするんだがな。すまん……。また答えになつたらん。

春はなんだろうね……。花粉症……。あら？……。芽がふく……。花……。花見……。酒……。だめだこりゃ……。ものすごい冒険物や、すんげーロマンチックな物語ですら、たいていは、机の上の創造物だねえ。でも、それ読んだ人の気持ちを動かすつてのはすごい、痛快じゃない？

〈まつ兄へ〉

(3月18日20時54分)

〈物を書いてみて、どんなふうに読む人が〉

〈愛の世界を感じるのかな？ つて考えると〉

〈なんかワクワクするね〉

〈痛快な気分だよ、とつても〉

〈でもね、想像で創造した世界と事実を混ぜて〉

〈書いたけどいいのかな？〉

〈決して嘘にはならないよね？〉

〈どんな世界を作るのかな、ちよつとこわいよ〉

〈まつ兄はさ楽しいけど、何かわけのわからない〉

〈こわさつてのに出会ったことある？〉

だから……まつ兄って……。

嘘つてのは、ほんとは、現実を上手に過ごすための、ツールだったのにな。嘘のための嘘の割合がだんだん増えてっちゃんだなあ……。

君の書く、想像+嘘の混ぜ合わせは、きつと読む人達の明日からのツールになるんじゃないかな？

(3月19日17時41分)